

大雪山国立公園における携帯トイレ普及に向けたシンポジウム 議事概要

- 日 時：平成30年1月27日（土）13:00～15:30
- 場 所：道民活動センターかでの2・7 520 研修室（北海道札幌市）
- 参加者：69名
- 主 催：大雪山国立公園連絡協議会
- 後 援：環境省北海道地方環境事務所、林野庁北海道森林管理局、北海道

■概 要：

1. 事例発表

以下の3名によりスライドを用いて発表が行われた。発表内容は配付資料のとおり。

- ・山のトイレを考える会 事務局長 仲俣善雄氏
「美瑛富士避難小屋のトイレ問題と携帯トイレ利用促進の取り組み」
- ・十勝総合振興局環境生活課 主任 牛嶋あすみ氏
「トムラウシ南沼での取組について」
- ・上川自然保護官事務所 首席自然保護官 榊厚生
「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言を目指して」

2. パネルディスカッション

<テーマ> 「大雪山で携帯トイレの利用を広げるためには」

<コーディネーター> 北海道大学大学院農学研究院 准教授 愛甲哲也氏

<パネリスト> 山のトイレを考える会 副代表 小枝正人氏

公益社団法人日本山岳会北海道支部 長谷川雄助氏

マウンテック・大橋 代表 大橋政樹氏

北海道大学ヒグマ研究グループ 松浦暉氏

上川自然保護官事務所 首席自然保護官 榊厚生

<概 要>

（コーディネーター・愛甲氏）

今回シンポジウムは、大雪山で携帯トイレの利用を広めることをテーマとするものである。先ほどの事例紹介の中で、美瑛富士で6割以上、トムラウシで8割以上の方が携帯トイレを持参しているという報告があったが、今日会場に来られている方のうち携帯トイレを山に行く際に持参しているという方は挙手願いたい（⇒ほぼ全員が手を挙げる）。さらに実際に使っているという方は挙手願いたい（⇒7割程度が手を挙げる）。やはり少し少なくなるようである。

以前に比べて携帯トイレを販売している場所も増え、道外の人でも持参してくれるようになってきている。しかしながら、実際に山で携帯トイレを使えるかどうかと言われると、少し難しい事情もあるのではないかと。まずはそのあたりの話も含めて、長谷川さん、大橋さん、松浦さんの3人にご意見を伺いたい。長谷川さんはベテランの登山者、また山岳会の関係者として、大橋さんはガイドとして、松浦さんは携帯トイレをほとんど使ったことのない登山者として、正直に、携帯トイレの使用について意見や感想、印象などをお話しいただきたい。

(長谷川氏)

事例発表を聞き、山のトイレを考える会や各行政機関には、私たちの山登りの後始末に大変ご迷惑をおかけしていることをお詫びしたいという感想を持った。昔はコケモモの生えているところにテントを張ったり、沢で用を足したりしていた時代もあったが、当時は山を汚しているという感覚はなかった。かつて、登山はごく一部の人が楽しむものだったが、百名山ブームが到来し、登山人口が大きく増えたことで、山が持つ浄化能力を超える負荷がかかっているのが現状だと思う。山は悲鳴を上げているというのが、今日の話聞いてよくわかった。

例えば、天然水が流れていても、その水源が排泄物で汚されていれば、天然水を飲むものはばかられる。飲食物と同じように、携帯トイレも持参する時代になるべきだと思っており、携帯トイレを持って山に登るよう仲間にも言うし、自分も使うようにする。一方で、使用済み携帯トイレと食料を同じザックに入れるのには抵抗がある。ザックに携帯トイレ用ポケットをつけ、他の荷物と分離できるようにしているが、このように装備の工夫次第では、抵抗がなくなり、安心できると思う。登山者が携帯トイレを使用するためにはどのような装備が必要か考え、メーカーにも対応していただけるとありがたい。

(大橋氏)

山をフィールドにして仕事をしているので、山の自然環境を大切に、と特に考えている。今、ほとんどのガイドは携帯トイレを持参しており、私も5～6年前から、縦走参加者には1個は渡すようにしている。携帯トイレを持っている登山者も増えており、普及は進んでいると感じる。お客さんには使用済みの携帯トイレをザックに外付けで携帯してもらっているが、抵抗はなさそうである。

事例発表の中で、南沼では携帯トイレを持っているが使用しないという人もいたが、例えばヒサゴ沼から南沼への縦走ガイドの際は、常設トイレのあるヒサゴ沼で便を出し切るよう言うようにしている。人間は排泄のタイミングをある程度コントロールできるため、持っているが使用しない理由としては、そのような工夫をしているという面もあるのではないかな。

秋ごろの南沼では、尿の臭いがテン場に漂っている。全国の山に登るが、南沼は日本一汚いという実感はある。南沼のブースを増やすのは大変だし、ブースと野外の違いは便座があるかないかだけなので、岩陰など見えないところで携帯トイレを使うようにすればいいのではないかな。美瑛富士には、予算に余裕があるのであれば、小屋型携帯トイレブースが必要だと思う。

(コーディネーター・愛甲氏)

ガイドも使うし、お客さんにも携帯トイレを渡しているとのことだが、お客さんは使用してくれるのか。

(大橋氏)

ガイドもお客さんも半分くらいは使用せずに持って帰っている。中にはドラッグストアで販売しているもので代用している人もいる。携帯トイレの外袋は高く、何回も使用できるので、中だけを買うという方法もある。

(コーディネーター・愛甲氏)

実際の山での状況を聞いて参考になった。北海道大学ヒグマ研究グループでは、どのような活動をしているのか。

(松浦氏)

毎年黒岳のお鉢平で、双眼鏡でヒグマを観察している。他のメンバーも含め、携帯トイレの存在は知っているが、使用したこともなければ購入したこともなく、回収ボックスを見たことがあるメンバーもいないと思う。使ったことがないので、漏れるのではないか、ザックに入れて大丈夫かという心配がある。山中で連泊する場合など日数が多いと、全てを携帯トイレで持ち帰るのは、荷物も重くなるし購入費用もかさむので、学生の立場としては難しい。持ち物などは先輩に教わるため、先輩が持っていなければ持って行くことはなく、逆に一度定着すれば、毎年持って行くようになると思う。

(コーディネーター・愛甲氏)

お鉢平で活動するとき、トイレはどうしているのか。

(松浦氏)

基本的に黒岳石室を利用する。大は朝トイレでしておいて、小は1日1、2回岩陰に隠れてしている。グループのメンバーが代々小に使ってきた岩陰がある。ティッシュについては持ち帰っている。

(コーディネーター・愛甲氏)

山のトイレを考える会としては、大雪山の登山者に携帯トイレを普及啓発する際、負担や使用への抵抗感についてはどう考え、登山者にどのように説明しているのか。

(小枝氏)

大雪山全体で携帯トイレの普及を進めることは大賛成である。南沼で2001年に実施したアンケート調査では、当宿泊者のうち携帯トイレを持参している人は4～8%だった。2017年には、84%であり、携帯トイレの普及も実感している。時代の流れとともに登山者の意識が変わってきたと感じる。

このシンポジウムの素晴らしいところは、大雪山国立公園連絡協議会という環境省、北海道、関係市町で構成する協議会が携帯トイレ普及のための宣言をしようとしている点。行政側は、登山者が携帯トイレを使いやすい環境にするためのベースを整備しようとしており、当会としても、登山者側でできることを考えている。私たちができることは、携帯トイレのことを多くの登山者に知ってもらい、持参する登山者を増やすこと。その上で、行政には携帯トイレブースの整備や使用済み携帯トイレの回収など、携帯トイレを利用する人が使いやすい環境整備を行ってもらいたいと思うが、今回の宣言により、そうした環境整備がより進みやすくなるという点も重要であると考えている。登山者と行政が協働して携帯トイレを普及していくことが、大雪山を守っていくことにつながる。

(コーディネーター・愛甲氏)

改めて、大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言（以下「宣言」という。）の骨子案をご覧いただきたい。先ほど榊さんから説明があったが、宣言の主体は大雪山国立公園連絡協議会で、パートナーシップ若しくは共同宣言にする形で、民間団体や事業者と協働して宣言をしていきたいというもの。山岳会やガイド、山に登ったり山で調査をしたりする学生団体、それぞれの立場で感想を述べていただきたい。

（松浦氏）

宣言中の「自然環境へ大きな影響を与えうる場所」とあるが、そのような場所や調査地で、部分的に携帯トイレを使うなど、できることからやっていきたい。仲間内で携帯トイレの利用を呼びかけていきたいと思う。

事例発表の中にあつたヒサゴ沼のトイレ内のゴミの画像にはショックを受けた。ゴミを捨てるのは若い人が多いのではないかと思うが、大雪山で登山をしたり研究をしたりしている学生の団体として、小さいことからコツコツと直していければいいと思った。

（コーディネーター・愛甲氏）

非常に前向きな発言をいただいた。宣言の内容に、特に無理は無いと感じたということの良いか。

（松浦氏）

そう。やれることからやる。

（大橋氏）

北海道山岳ガイド協会の総会で携帯トイレの普及について再確認したい。道外の登山者の方が携帯トイレについて認知度が低いので、道外へのPRが大切だと思う。また、北嶺高校の学校登山で旭岳をガイドしたとき、生徒は携帯トイレを使用して小も持ち帰っており、若いうちから携帯トイレを使用することはより普及につながると感じた。トムラウシも登山者が3,000人以上いるので、最低限、小をする場所を分散するなどしたらいいのではないか。

（コーディネーター・愛甲氏）

北嶺高校での携帯トイレの使用は、先生の指導か。

（大橋氏）

先生の指導である。先生が携帯トイレの使用を指導していない高校では、生徒たちは使用していない。

（コーディネーター・愛甲氏）

若いときから使えば、登山では携帯トイレを使うものと思うようになる。利尻山での携帯トイレの普及については、関東の山道具店でPRしたのも効果的だった。道外の方にとって、宣言はPRになるか。

（大橋氏）

PR になると思う。大雪山で携帯トイレの普及を始めた初期に実施された携帯トイレの無料配布も、今ジワジワ効いてきていると感じる。

(長谷川氏)

宣言の利用者への呼びかけの部分について、山岳会加入者は道具の使い方について指導を受けるが、山岳会に入っていない登山者に対して、携帯トイレ使用の指導をどう行うかが一番心配。山岳会に入っていない登山者に主眼を置き、「携帯トイレを持たないと大雪山には入れない」などインパクトのある言葉が必要ではないか。あるいは美瑛富士や南沼の現状をもっと PR し、夜中臭くて起きてしまうような状態でもいいのか、などと PR してほしい。

(小枝氏)

宣言については大賛成。当会は組織に属していない登山者への広報がポイントと考え、彼らが北海道の山を登るときに、どこから情報を得るのか分析し、情報を得る WEB ページにリンクを貼ってもらうなどして発信しようとしている。ヤマレコや YAMAP にも情報を載せて広報していきたいと考えている。

(コーディネーター・愛甲氏)

宣言が発出された後の展開について榊さんに伺いたい。

(榊)

前向きなご意見を多くいただきありがたい。みなさんと連携して登山者への周知をしていきたい。快適な登山をするために、誰かだけが過度に負担するのではなく、みんなが少しずつできることをする、というのが携帯トイレのシステムだと考えている。本当は尿も含めて全て持ち帰ってほしいと考えているが、できることから進めていくことが今必要なことと考えている。今日いただいたご意見も踏まえて宣言に手を加え、来シーズンに打ち出せるようにしたい。

(コーディネーター・愛甲氏)

本日、携帯トイレの普及に取り組む早池峰山から、早池峰にゴミは似合わない実行委員会代表の菅沼さんにも来ていただいている。今回の宣言へのアドバイスをいただきたい。

(菅沼氏)

事例発表の中で、楽しみながらやっていきたいという話があって思いついたが、例えばNTT ドコモをもじって、「MTT (Mountain Toilet Takeout) ドコモ」＝「大雪山ではどこでも携帯トイレを持参する」というような呼びかけの工夫を行うことでも楽しくやっていけるのではないか。シンポジウムのシンポを「進歩」とすると、携帯トイレそのものの使いやすさの進歩、利用者意識の進歩、どちらも大事である。山のトイレ問題は北海道や早池峰だけではなく、様々な山で生じている。しかし、登山者は見て見ぬ振りをし、お金を出してもいいから山で快適に過ごしたいという考えを持ち、また行政もその声に応え続けてきた結果、山で快適に過ごせるのは当たり前という意識を登山者に根付かせてしまった。自然を求める登山なのに、利便性を求めるのは不自然。牛嶋さんからトムラウシは地域みんなの山というお話

があったが、今の自然は未来の子どもたちからの預かり物と言われており、今ある自然を未来の子どもたちにしっかりと送り届けることが、私たちの責務である。自然に負荷をかけずにどこでもできる究極のトイレ方法である携帯トイレを、登山者のステータスシンボルにしていきたい。

(コーディネーター・愛甲氏)

今回非常に印象に残ったのは、長谷川さんの、行政に後始末をさせてすみません、というコメント。自分たちで山へ登った後始末をするのが携帯トイレではないか、とみなさんのお話を聞きながら思っていた。菅沼さんのおっしゃったように、便利を当たり前と思うのではなく、自分の後始末は自分で行うという登山者が増えて、大雪山がきれいになることを目指して、宣言を協議会で議論し、作って、広報していくことになる。

ぜひみなさんもパートナーシップや共同宣言に手を挙げて、普及や活動に協力していただければと思う。最後に、宣言に賛同いただける方は拍手いただきたい(⇒会場から大きな拍手)。

以上をもって閉会となった。

(参考) パネルディスカッションの様子

